

書 評

大阪大学ショセキカプロジェクト編
 ドーナツを穴だけ残して食べる方法
 越境する学問—穴から覗く大学講義

仁 平 政 人*

「ドーナツを穴だけ残して食べる方法」—— 一見、とてもナンセンスな問題である（常識的に考えれば、ドーナツを食べてしまえば穴は存在なくなり、従って「穴だけ残す」ことは不可能だ）。本書は、この奇妙な「ドーナツの穴問題」に対して、文系・理系双方の大学教員がそれぞれの専門の視点からあえて真剣に解答を試み、それを通して各学問の考え方について解説を行う、という独特なコンセプトを持つ教養書である。

この企画の成り立ちについては、本書中で詳しく述べられている。重要な点のみ確認すると、本書は「大阪大学の知を、学生が中心となってショセキカ（書籍化）する」という趣旨のプロジェクトによるものであり、「ドーナツの穴問題」というテーマ自体、学生の発案によるものだという。すなわち、学生側の「無茶振り」的な問題に対し、各領域の教員が時に戸惑いをにじませつつも応じていく、そのスリリングな過程が本書の魅力の一端を為していると言っているだろう。そしてもう一つ興味深いのは、この「ドーナツを穴だけ残して食べる方法」という問題が、本来インターネット上で流行したジョークであったということだ（本書中の松村真宏氏の論考が紹介するところでは、この問題に対して「物理派」「数学派」「芸術派」「政府派」「一休派」（！）などがそれぞれどう回答するか、ウィットに富んだ答えが考案されているようだ）。つまりこの「ドーナツの穴問題」は、学問に対する世間のイメージを、戯画的な形でうつし出すものなのである。以上を踏まえると、この本の企画は、教員（研究者）が学生や社会に向けて一方的に学問を語るのではなく、むしろ学生の用意した難問に向き合い、また学問をめぐるステレオタイプなイメージに対してその実際の姿を示そうとするという意味で、すぐれて対話的な性格を持っているのだと言えるだろう。

具体的な内容を簡単に紹介しよう。本書には文理あわせて13名の教員が論考を寄せており、第1部は「ドーナツを穴だけ残して食べる方法」を直接扱う論考、また第2部は、より広く「ドーナツ（の穴）」というテーマを通して自らの学問領域を語る論考を収める（ただし、第1部・第2部の境界は必ずしも厳密なものではなく、第2部にも「ドーナツの穴問題」を扱う章は見られる）。「ドーナツの穴問題」を扱う章に目を向けると、例えば工学専攻・高田孝氏は、問題のポイントを「穴を残す」ことだと捉え、穴を残したままドーナツを限界まで薄く削る工学的方法を解説する。これが最も現実的な方法とすれば、数学専攻・宮地秀樹氏は対照的に、問題を「あなたの友人がドーナツの穴を認識したまま、あなたはドーナツを食べることが出来るか」と言い替えた上で、トポロジーの視点を用いて「4次元空間なら可能だ」という解を導き出す。他方、美学専攻・田中均氏は有名な美学の議論を応用し、穴どころかドーナツ自体も食べても無くなることはない、と論じてみせる。その他、人類学者・大村敬一氏は「ドーナツの穴問題」のようなパラドックスを生み出す能力に人類の創造力の秘密があることを示し、また法学専攻・大久保邦彦氏は「ドーナツ」にまつわる実在の裁判の判決を元に「ドーナツを穴だけ残

*弘前大学教育学部
 Faculty of Education, Hirosaki University

して食べる方法」を生みだし、法が詭弁や擬制を用いて発展してきたことを論じる…等々。これらの例にも見られるように、「ドーナツの穴問題」に対する答え以上に、問題にどう向き合うのかという点にこそ、各学問領域の（もしくはそれぞれの研究者の）個性が示される。こうした点でこそ、本書は学問への興味深い入門書となっているのだと言えるだろう。

本書中のいくつかの論考が示唆するように、そもそも人間の知や文化は、根本的には現実への密着から一歩離れることによって成立する。「ドーナツを穴だけ残して食べる方法」という、非現実的で一見ナンセンスな問題が、「実学と虚学」といった杜撰な二分法を軽々と超えて、多様な分野が集う豊かな知の地平を開いていくことは、そのことを物語っているのだと言えよう。こうした意味で本書は、軽やかな外見にもかかわらず、意外に深く人間の「知」の本質にも触れているように思われるのである。